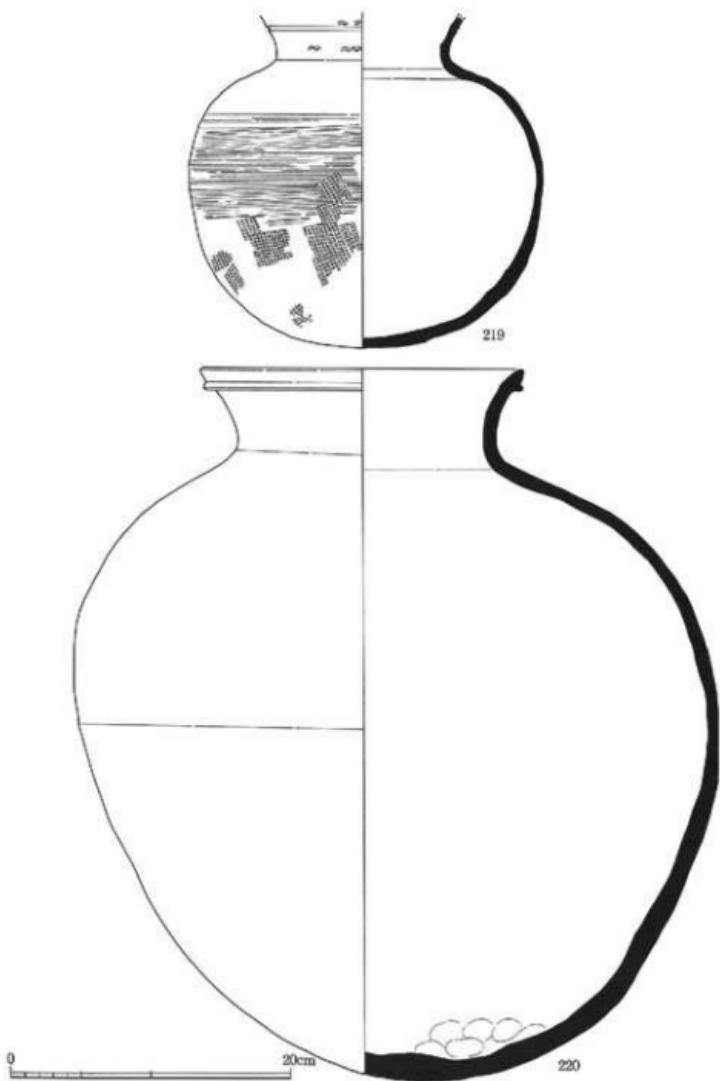


第84図 12-OX出土遺物 (4)

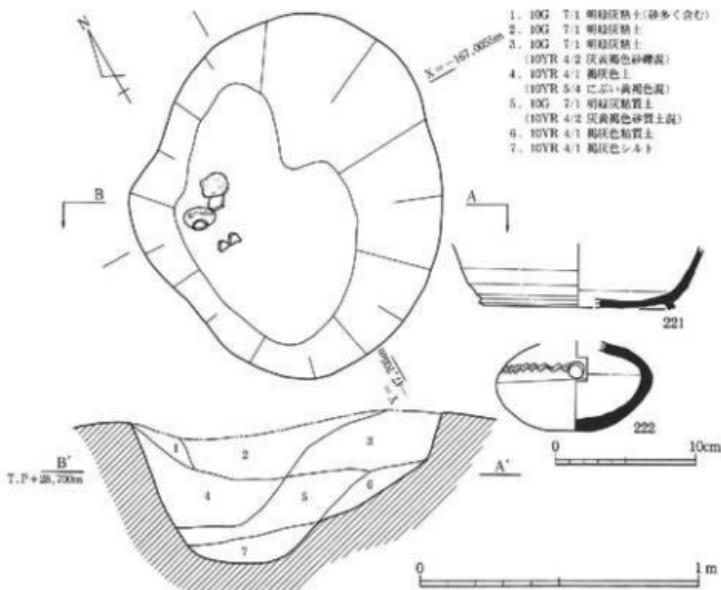


第85圖 12-O X出土遺物(5)

76-OOは、その6の調査区東側に位置する自然河川左岸肩部の南東側で検出した。上部は近世の削平を受けているため、本来の形状や規模は不明である。

長径1.3、短径1.1mの長円形の平面を呈する。深さが0.55mあるが、最深部は北西側縁による。同じく、土坑底より出土した遺物も同方向によっていた。したがって、断面形はレの字に近いような形状をなす。埋土は上層が明緑灰色粘土、中層が褐灰色土、下層が明緑灰・褐灰色粘質土、最下層が褐灰色シルトとなり、総じて南東側は砂質がかり、比較的オープンな環境で埋まつたと考えられる。

出土遺物には須恵器ハゾウと杯身がある。ハゾウは体部径が11.2、現存高7.4cmあり、算盤玉様に体部中央が最も張り出し、そのやや上よりに円形の孔と3条の櫛状波状文がある。杯身は低く外方に開いた断面コの字の高台がつくものである。底部中央は下がり、全体に丸みを帯びる。双方とも色調は灰白色で、胎土は緻密である。



第86図 76-OO平・断面図、出土遺物

谷状遺構出土遺物（第87図）

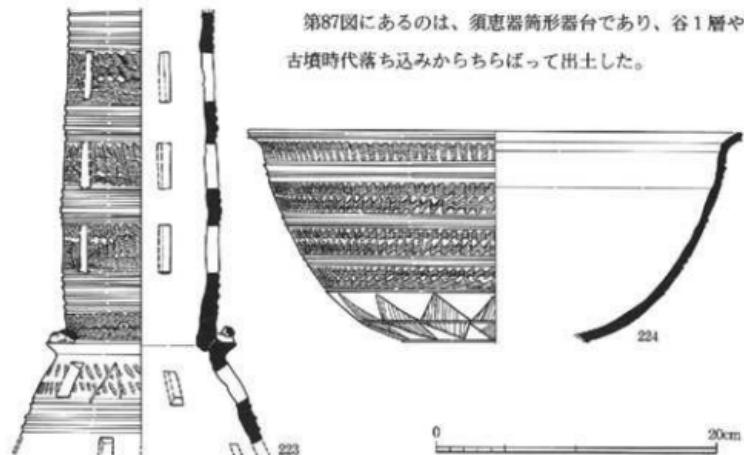
母丘陵斜面から下って河川氾濫原に移る傾斜変換点やや北にふる東西方向の幅25mに及ぶ谷がはしる。その谷は調査区の中央やや東よりに横断し、木材をはじめ、多種多様な遺物が出土する。

出土木製品には、5層からは板状、円形孔のある板、4脚がつく径14.2cmの円形容器。7層は円形孔のある板、広鍬木製品、広鍬形未製品がある。

出土土器には、1層からは5～8世紀の須恵器杯蓋・身、壺があり、7世紀を中心とする。2層は一部弥生土器を含み、5～7世紀の須恵器杯蓋・身、高杯、有蓋高杯、有蓋短頸壺、ハゾウ、コップ形、甕があり、5・6世紀を中心とする。3層は、一部5世紀台の須恵器・土師器を含み、弥生土器の綾杉文・円形浮文のある広口壺、凹線文のある甕、斜格子文・櫛描直線文のある壺、高杯形土器など畿内第Ⅳ様式を中心とする。6層は弥生土器中心で、木の葉文のつく底部、壺、鉢、高杯形土器がある。畿内第Ⅲ様式から庄内式まである。7・8層も同じで、底部にヘラケズリがあるものや高杯形土器が目立つ。他に甕・壺・鉢形土器もあり、櫛描廉状文、凹線文のつくものもある。畿内第Ⅲ様式を中心とする。

出土石器には、5層から石槍、6層から大形の石鏸などがある。

第87図にあるのは、須恵器筒形器台であり、谷1層や古墳時代落ち込みからちらばって出土した。



第87図 谷内出土遺物

## 第V章　まとめ

今回の調査では、弥生・古墳・飛鳥・奈良・平安時代後期の遺構・遺物が検出・出土し、梅丘陵から下がった和田川沿いの河川氾濫原上に縄文時代早期の横大路火山灰層、後・晚期、弥生時代前期の土器をはじめとした各時代の重層した人間の営みとその環境を具体的に明らかにすることができた。

各時代順に、その特徴を振り返ってみると、弥生時代は土器からすれば、今回の調査区において中期のはじめごろを中心として集落が最も活発に展開していたようである。

今回の調査では竪穴住居跡が5棟分検出された。建物跡は大型のものを2棟含み、内1棟は3棟分が重複して検出された。この重複して検出された竪穴住居跡は非常に大型のもので直径約13m、床面積133m<sup>2</sup>になる可能性がある。

この遺跡の周辺では岸和田市畠遺跡で直径約11m（住居17号）のものが検出されおり、弥生時代後期にはなるが和泉市観音寺山遺跡・懸ノ池遺跡などでも検出が挙げられるが、いずれも直径が10m前後のものである。また、神奈川県の三殿台遺跡で検出された306C住居跡は床面積134m<sup>2</sup>を測り、野々井遺跡の住居跡とほぼ同じ規模を示すものもある。

大型の竪穴住居跡は柱の数が推定22本と多く、2重に柱を立てる珍しい構造であることや、新古3時期の炉を中心として立て替えがおこなわれている。なんらかの制約があったのかもしれない。炉からは排水溝が大きく住居跡外に延びており、竪穴住居跡内にはこの排水溝に蓋をしていた珍しい構造も確認された。

113・139-O Sは、現在300m西側を流れる和田川の屈曲と平行して南北方向から西北西方向にくの字に折れながら、T.P.27.2~26.75mへと溝底を北側へと下げていく。113・139-OSは60m東にあるその6の谷も、くの字に屈曲し平行して存在する。この向きの北東側の微高地をたどると、少なくとも径150mエリアは集落として構成していたと考えられる。

いずれにせよ、弥生時代中期の集落がその1・2、その6東側地点から北側に大きく広がっていることが予期される。また、住居の構成としては、大型1棟、小型1棟の竪穴住居がセットとなり、50~60mほどの間隔をまもって立ち並んでいた可能性がある。また、その2・C地区、竪穴住居1-O Dの北東には高床の掘立柱建物があり、中央の1対とユニットになる可能性がある。また、同様に西の1対のすぐ東にピット群があることから、

これも類似したユニットを形成するかもしれない。

今回の調査区で弥生時代の出土遺物で木製品は目立った存在である。脚付きの円形容器の蓋になるであろうもの、広鍬・狭鍬の未製品などがあるが、中でも特筆できるのは、枠状木製品と広鍬未製品の保管土坑である。

枠状木製品は、枠形田下駄とも考えられるが、建築部材であるとすれば、壁の一部を構成、もしくは窓あるいは扉状の装置になるのかもしれない。細木を結合させていたものと考えられ、平行してある2本の縦枠に相当する部分の間を埋めるように直交させ平行に組み、それらの両端をやや細くした横桟が下に並ぶ。調査ではこれらを繋ぎとめる痕を認めることができなかったが、類例の増加を待ちたい。

広鍬未製品はいずれも直柄式のもので、近畿地方の弥生時代中期の代表的な類のものに属する。板材を切断し、頭部の輪郭をつけるために上部両端を斜めに切り落として外形をつくり、上端側に横方向に溝と段をつけて泥除け装着の段を作り出す。片面の頭部付近を山形に突出させ柄穴の隆起に備えるが柄孔は穿たれていない。これは柄穴を穿つ前に狂いを防ぐために一定期間ねかすことが必要であったと考えられるが、本例はその具体的な状況を指し示したといえる。また、谷状造構などの木製品の出土も合わせ、こうした未製品を通じて製作技術や工程、使用工具、製作の実態をもうかがい知ることができる。

弥生時代後期の主だった遺構としては、中期の大溝113・139-O Sの東側に溜まり状になった溝50-O Sがあり、弥生時代集落が後期までこの地点で存続していたことが分かる。

古墳時代は意識的に長期にわたって須恵器を中心とした土器を並べた土坑12-O Xがあり、5世紀後半の祭祀的な遺構の性格をおわせる。

飛鳥時代の溝群561・53・60・61・63-OSは、南側から流れる和田川が今回の調査区南500mから大きく西にふれるところから導水し、ちょうど調査区の西側で東にまた向きを変える、その南方で和田川へと排水する可能性があり、この時期にこうした導水に基づいて、調査区辺りの土地が漬漬されはじめたと考えができる。こうした施設の存続は溝8-O Sの開削、埋没時期などから考えると、7世紀の間続いたものと想定できる。

平安時代後期の建物群4棟は全体に西に15°ほどふれるが、その立地する地点を含めて幅100、長さ400mの南北に、これも西に15°ほどふれた長い方形区画屋敷地が広がっていた可能性があり、その区画の北端に建物群が位置することになる。つまり、鶴丘陵の西側で舌状に貼り出した地点にそって和田川は西に大きく蛇行するが、その貼り出しを整備し、川近くに設けた区画に屋敷が立ち並んでいたことになり、その前後の南北道もまたその左右に想定することができる。

## 第VI章 付章

### 第1節 陶邑北部における縄文時代以降の植生変遷

川崎地質株式会社 渡辺正巳・古谷正和

#### 1. はじめに

大阪府南部の堺市・大阪狭山市・和泉市・岸和田市にまたがる泉北丘陵には、古墳時代以降、10世紀までの窯跡が多く残っている。

これらの窯跡は、日本書紀にある「あらのあがた 茅県 陶邑」との関係から、一括して陶邑古窯址群と呼ばれている（田辺・1966）。

陶邑およびその周辺では、研究発掘や泉北ニュータウンなどの宅地開発および近畿自動車道建設に伴う発掘調査がおこなわれ、陶邑の全容が明らかになりつつある。

今回の報告は、財団法人大阪府埋蔵文化財協会の委託を受け、川崎地質株式会社が実施した一連の分析調査をまとめたものである。

分析調査の対象地点は、陶邑北部の伏尾・大庭寺・野々井の各遺跡、および陶邑の北に位置する平井遺跡であり、各地点での花粉分析から、陶邑およびその周辺地域での植生変遷を考察したものである。

また、野々井遺跡において鬼界アカホヤ（K-A h）火山灰に対比できる火山灰層が検出されたので、これについての記載もおこなった。

#### 2. 試料について

試料採取地点を第88図に示す。平井遺跡、伏尾遺跡は陶器川水系に、大庭寺遺跡は石津川水系に、野々井遺跡は和田川水系に位置する。

それぞれの遺跡内で、小谷を埋積する堆積物を主な対象として試料採取を行った。



第88図 試料採取地点位置図

試料番号、試料採取層準および推定堆積年代（歴史時代）などを第89～97図の花粉ダイヤグラムに示した。また、伏尾遺跡1・2-1・2-2地点は、すでに公表済みのデータ（川崎地質（株）、1992）を再検討したものである。

### 3. 分析方法及び分析結果

花粉分析方法は川崎地質株式会社（1992）に従った。また、花粉分析結果を第89～97図の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは、基本花粉総数を基数とする百分率で各々の種類をダイアグラムに表した。

火山灰分析方法は、吉川ほか（1986）に従った。火山灰分析結果を第1表に示す。

### 4. 火山灰層の対比

野々井遺跡で発見された火山灰は沖積層内に挟在され、屈折率が1.510付近を示すことから吉川（1986）の横大路火山灰層（鬼界アカホヤ火山灰層）に対比できる。

今回の分析結果で重鉱物のうち角閃石が卓越するのは、後背地に分布する花崗岩の影響と推定できる。

第1表 火山灰分析結果

私物組成	重鉱物組成						ガラス形態	ガラス屈折率
ガラス 石英・長石 重鉱物 8 7 3 -	黑雲母	角閃石	斜方輝石	單斜輝石	矽灰石	不透明鉱物	扁平 中間 多孔	
	1	6 3	1 0	2	1	2 3	5 0 4 6 4	1.511-1.512

### 5. 花粉分帯

4遺跡12地点の分析結果をもとに本地域での地域花粉帯を設定した。しかし、大庭寺遺跡での上部8試料は、現地調査で埋土であることが確認されており、花粉組成も他地点と著しく異なることから花粉分帯の対象から除いた。

それぞれの地点の花粉ダイアグラムの右端に花粉帯を示し、第2表に各地点の花粉帯及び推定堆積時期の一覧表を示す。また、第2表から明らかのように、これらの花粉帯は各地点ごとに示している時代が必ずしも一致せず、植生の変化に地点差があったことを示唆している。

それぞれの花粉帯の特徴を、時代的に古いものから順に以下に示す。

III带：地点によりシイノキ属がアカガシ亜属より高率となるが、ほとんどの地点でアカガシ亜属が卓越する。シイノキ属の他、コウヤマキ属、スギ属などの増減をもとに a～f 亜属に細分した。

f 亜带（野々井遺跡No.2 地点、伏尾遺跡No.3 地点）

アカガシ亜属の他には、ほとんど出現しない。

e 亜带（野々井遺跡No.1 地点、伏尾遺跡No.2 地点）

コウヤマキ属が10～30%程度出現する。

d 亜带（伏尾遺跡No.3 地点、平井遺跡）

シイノキ属が増加傾向を示し、やや高率で出現する。また、コウヤマキ属が低率ではあるが減少傾向を示す。b 亜帶と c 亜帶の中間的な傾向にある。

c 亜带（野々井遺跡No.1 地点、伏尾遺跡No.3 地点、平井遺跡）

シイノキ属が高率になり、平井遺跡、野々井遺跡ではアカガシ亜属より高率となる。また、野々井遺跡では c 亜帶上部からイネ科（40ミクロン以上）が高率で出現するようになる。

b 亜带（野々井遺跡No.1 地点、平井遺跡）

シイノキ属が減少傾向を示し、スギ属を初めとする針葉樹花粉がやや高率になり、野々井遺跡ではマツ属（複維管束亜属）の出現率がこれらより高率となる。

a 亜属（野々井遺跡No.1 地点、伏尾遺跡No.3 地点）

スギ属が低率ではあるが増加傾向を示す。

II带：（野々井遺跡No.3 地点、大庭寺遺跡、伏尾遺跡No.2・3 地点）：III带と I 带の中間的な組成を示すが、スギ属を初めとする針葉樹花粉が特徴的に出現する。

I 带：全地域でマツ属（複維管束亜属）が卓越する。マツ属の出現率の増加傾向、スギ属の出現傾向などから a～e 亜帶に細分した。

e 亜带（野々井遺跡No.1 地点、大庭寺遺跡、伏尾遺跡No.1～3 地点、平井遺跡）

マツ属が明かな増加傾向を示す。スギ属など、マツ属（複維管束亜属）を除く針葉樹花粉は減少傾向を示す。大庭寺遺跡では、マツ属（複維管束亜属）の増加は見られず、コナラ亜属が増加する。伏尾遺跡では、e 亜帶最下部からイネ科（40ミクロン以上）が高率で出現するようになる。

d 亜帯（野々井遺跡No.3地点、大庭寺遺跡、伏尾遺跡No.2地点、平井遺跡）

マツ属（複維管束亜属）が増加傾向を示す。一方アカガシ亜属は減少傾向を示し、上部では数%となる。また、スギ属などマツ属（複維管束亜属）を除く針葉樹は数%程度で安定して出現する。平井遺跡では、d 亜帯上部からイネ科（40ミクロン以上）が高率で出現するようになる。

c 亜帯（野々井遺跡No.3地点、大庭寺遺跡、伏尾遺跡No.1～3地点、平井遺跡）

マツ属（複維管束亜属）が増加傾向を示し、80%程度の高率を示すようになる。

b 亜帯（伏尾遺跡No.2地点、野々井遺跡No.3地点）

マツ属（複維管束亜属）が60～70%程度に減少し、他の種類が全体的に増加する。

a 亜帯（野々井遺跡No.1・3地点、伏尾遺跡No.1～3地点）

スギ属が増加傾向を示し、野々井遺跡No.1地点では20%を越える。また、伏尾遺跡No.1・3地点、野々井遺跡No.1地点では、アブラナ科が50%程度以上の高率で出現する。

## 6. 植生変遷

各遺跡での<sup>14</sup>C年代、火山灰層序年代および出土遺物の編年を利用して、花粉帯をもとに陶邑北部およびその周辺地域の縄文時代前期以降の植生変遷を次のように推定した（樹種名は、現在の植生から推定した）。

巻頭図版六に現在見られる森林植生（冷温帯林、照葉樹林、二次林、植林）の写真を示した。文中初出の部分に①～④の写真番号を示す。

1) 縄文時代（III带 f 亜帯：野々井遺跡・伏尾遺跡）

泉北丘陵一帯はアカガシ類を要素とする照葉樹林①に覆われていた。また、背後の葛城・和泉山地にはモミ、アカマツ、ツガ、スギ、コウヤマキなどを要素とする中間温帯林（温帯针葉樹林）が、山頂部にはブナを要素とする冷温帯林②が分布した。

2) 縄文時代中期～弥生時代中期（III带 e・d 亜帯：野々井遺跡・伏尾遺跡）

照葉樹林の構成種の内、シイノキ属が増加傾向を示す。また、伏尾遺跡及び野々井遺跡では、シイノキ属の増加以前にコウヤマキが増加し、中間温帯林の拡大・気候変化を示唆する。しかし両遺跡とともに堆積年代が特定できていないため、詳細は不明である。

### 3) 弥生時代中期（III带 c 亜帯：野々井遺跡・伏尾遺跡・平井遺跡）

平井遺跡、野々井遺跡周辺では、弥生時代前期に増加を始めたシノキ属がアカガシ類より優勢になる。また、野々井遺跡内の河川沿いの低地では、イネやソバの栽培が行われるようになる。

### 4) 弥生時代中期～後期（III带 b・a 亜帯：野々井遺跡・伏尾遺跡・平井遺跡）

照葉樹林の構成種として、アカガシ類が再びシノキ属より優勢となる。野々井遺跡周辺ではアカマツを要素とする二次林③が出現する。

### 5) 古墳時代（II带：野々井遺跡・大庭寺遺跡・伏尾遺跡）

調査地全体で照葉樹林が縮小する。陶邑の開発時期と一致することから、須恵器窯の燃料とするための森林伐採が一因と考えられる。

照葉樹林の縮小を人為的なものとすると、同時に起こる中間温帯林要素の増加は気候変化による分布域の拡大ではなく、照葉樹林要素の減少に伴う相対的な増加であると考えられる。また二次林要素であるマツ属（複維管束亞属）の増加が見られないことから、照葉樹林の伐採跡は丘陵部では裸地（草原？住居地？）化し、平野部では耕作地となった可能性がある。

### 6) 古墳時代末～中世（I带 e・d 亜帯：野々井遺跡・大庭寺遺跡・伏尾遺跡・平井遺跡）

照葉樹林は徐々に縮小し、アカマツを要素とする二次林が拡大する。また照葉樹林の縮小、二次林の拡大は、平井遺跡周辺で最初（平安時代初め）に顕著になり、その後大庭寺遺跡、野々井遺跡周辺（中世以降）、伏尾遺跡（近世以降）で顕著になる。

大庭寺遺跡周辺ではアカマツを要素とする二次林拡大の前に、ナラ類を要素とする二次林が拡大したと考えられる。また、和田川河床（野々井遺跡No.1地点）で見られるように、和田川上流部では現代（近世以降？）で初めて顕著な二次林化が起こった可能性がある。

大庭寺遺跡では、6C以降にソバの栽培が行われていたと考えられる。またほぼ同時に大型のイネ科花粉（40ミクロン以上）が増加することから、同時期に稻作が開始された可能性がある。同様に陶邑内で稻作が最初に実施されたと考えられる野々井遺跡No.1地点でも、ソバ栽培が同時に実施されたと考えられる。また伏尾遺跡No.2地点でも中世以降にではあるが、稻作と同時期にソバの栽培が開始されたと推定できる。

ソバの収穫期は稻と同じ秋であり、田の畦でソバが栽培されていたか、連作障害を防ぐため（？）に休耕田で栽培されていたか、あるいは二毛作として稻の収穫後に栽培されていたと考えられる。

#### 7) 近世～(I带c～a亜帶：平井遺跡・伏尾遺跡・大庭寺遺跡・野々井遺跡)

泉北丘陵上に分布する森林のはほとんどは、アカマツを要素とする二次林で、照葉樹林は一部に残存するのみである。また背後の葛城・和泉山地にも二次林が分布する。

開発により二次林の伐採がおこなわれる地域もあり、近代以降にはスギ植林④が行われる。また開発による裸地（草原、耕作地あるいは宅地？）が拡大し、水田の裏作としてアブラナ栽培が実施されるようになり、平井遺跡では綿花栽培が行われた。

野々井遺跡ではため池が作られ、大庭寺遺跡では谷を埋め立て水田耕作を行った可能性がある。

#### 7.まとめ

陶邑北部に位置する伏尾・大庭寺・野々井の各遺跡、および陶邑の北側に位置する平井遺跡内の11地点で花粉分析、火山灰分析、“C年代測定を行い、およそ縄文時代前期～現代にいたる、同地域および周辺地域での植生変遷を第2表のように推定した。

このうち、注目すべき点として以下のことがあげられる。

(1) 照葉樹林縮小（アカガシ亜属減少）の初期に、他の花粉の相対的な増加が認められ、照葉樹林縮小（アカガシ亜属減少）と二次林拡大（マツ属：複雑管束亜属の増加）には若干のずれが認められる。第2表では「草地？」と表しているが、耕作地や住居地の可能性もある。

(2) 二次林の拡大（マツ属：複雑管束亜属の増加）には、各地点で差異が認められた。

陶邑の開発は全地域で一齊に行われたのではなく、開発状況（開始時期・速度）が異なったと考えられる。このことは、稻作の開始時期と考えられる大型のイネ科花粉急増時期の各地点での違いからも明らかである。

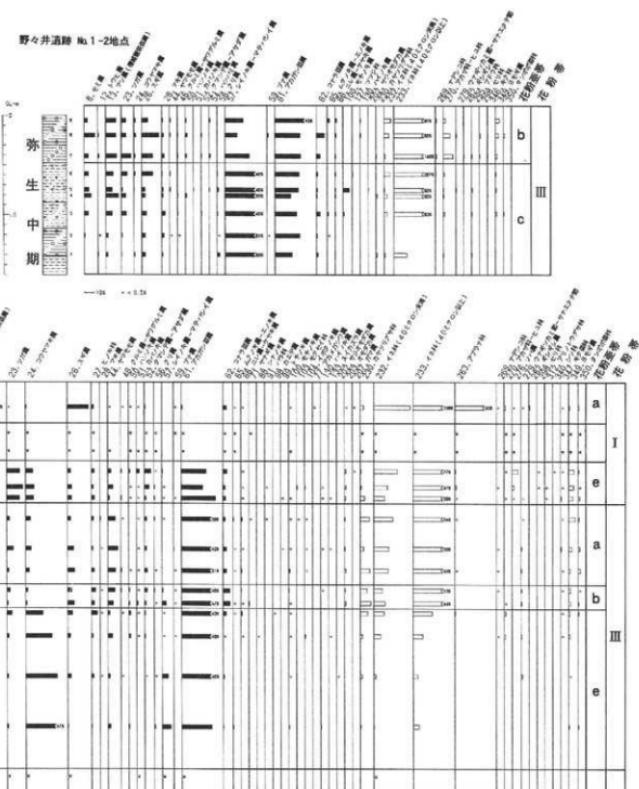
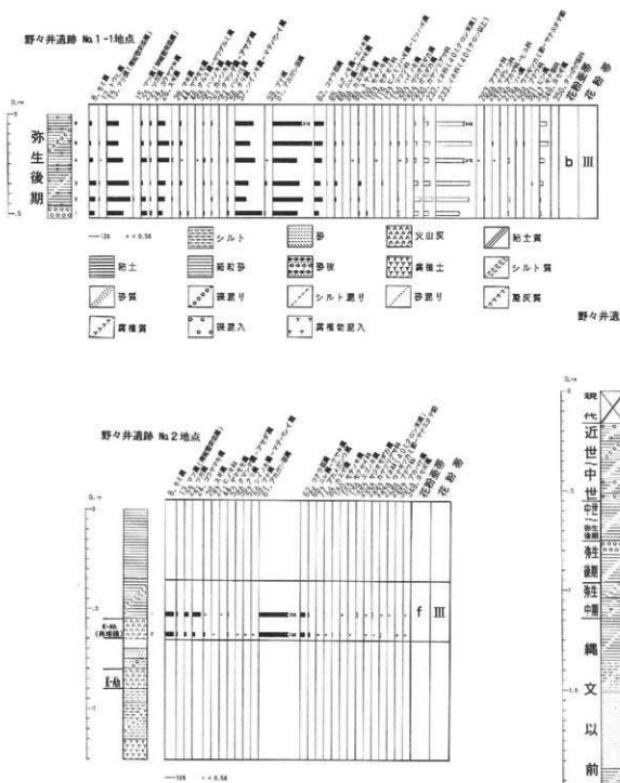
(3) 現在も見られるように、二次林にはアカマツを要素とするタイプと、コナラ類を要素とするタイプがあったことが明らかになった。

(4) 弥生時代中期を中心として、シイ林の拡大が認められる。従来弥生時代中期を中心とする時期は、気候の冷涼化・湿潤化に伴うスギをはじめとする中間温帯林要素の増加期

とされていた。一般にはシイ林の拡大は温暖化による現象が考えられ、矛盾する。シイノキ属の生態の究明が今後の検討課題として残る。

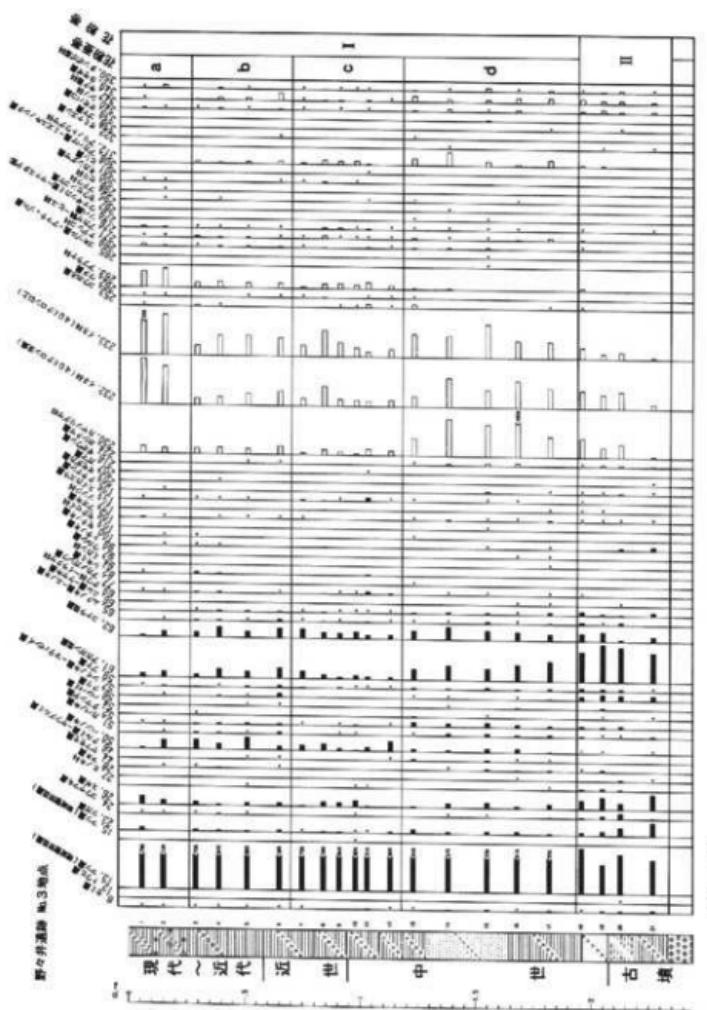
#### 引用文献

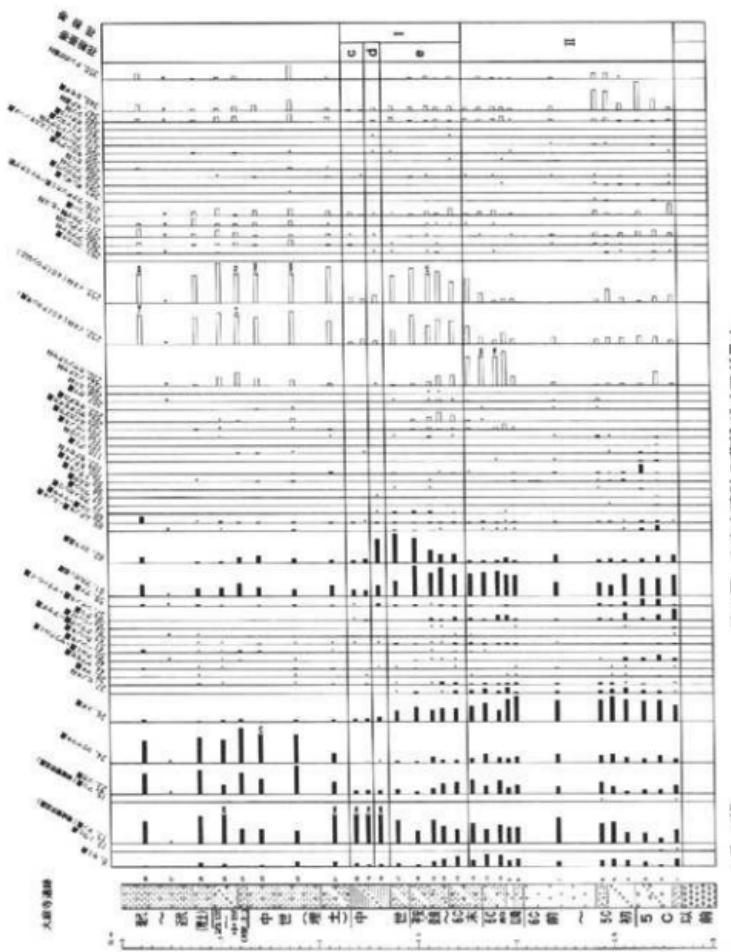
- 1) 川崎地質株式会社：「伏尾遺跡発掘調査に伴う花粉・珪藻分析」　『陶邑・伏尾遺跡II A地区、75-89』大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会、大阪（1992）
- 2) 田辺正三：「陶邑窯跡群I、3-5」　『平安学園考古学クラブ』京都（1966）
- 3) 吉川周作・那須孝悌・樽野博幸・吉谷正和：「近畿地方中部に分布する後期更新世～完新世の火山灰層について」　『地球科学、40. 18-38』（1986）



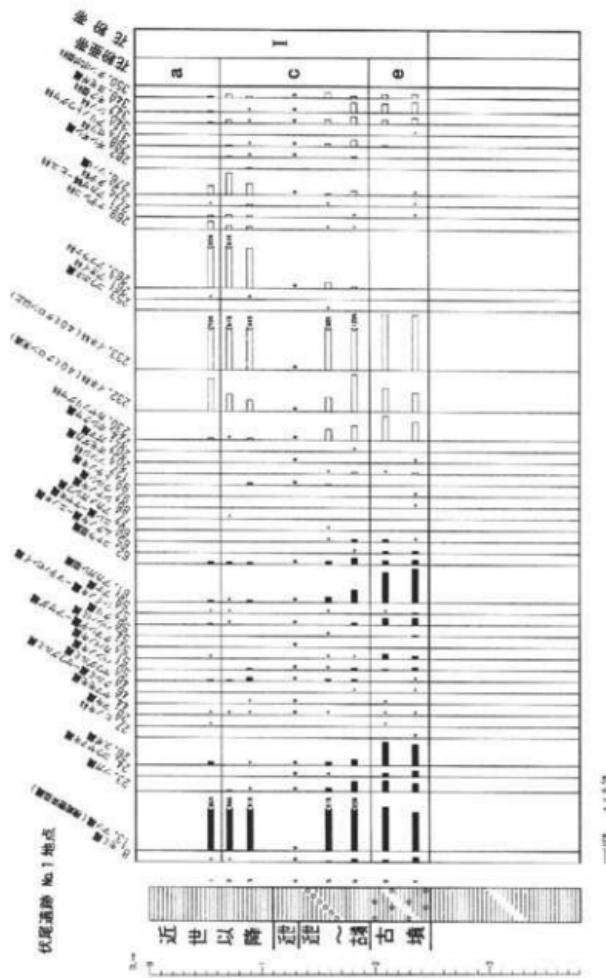
第89図 野々井遺跡No.1-1~3, 2地点の花粉ダイアグラム

第90図 野々井遺跡N<sub>o</sub>.3地点の花粉ダイアグラム





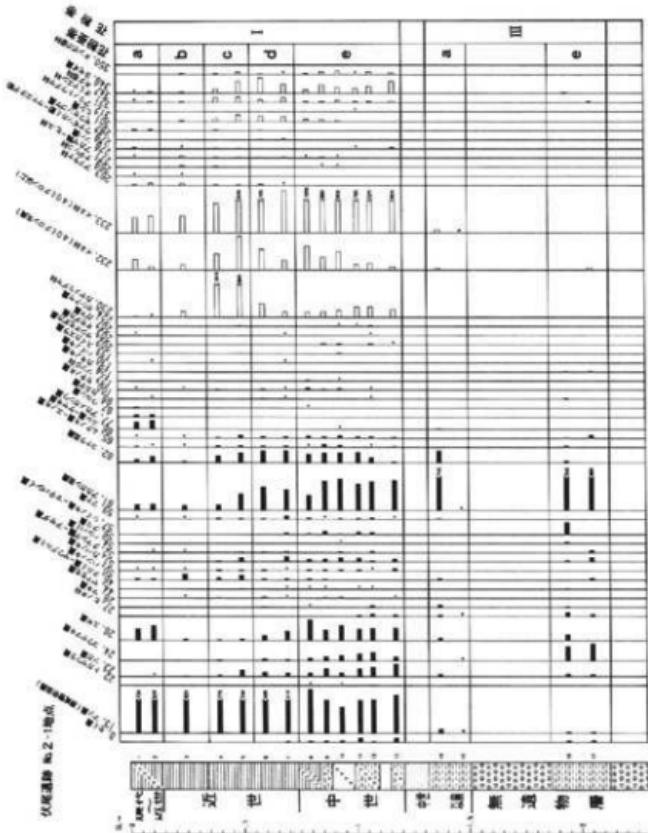
第91図 大庭寺遺跡の花粉ダイアグラム



第92図 伏尾遺跡No.1 地点の花粉ダイアグラム

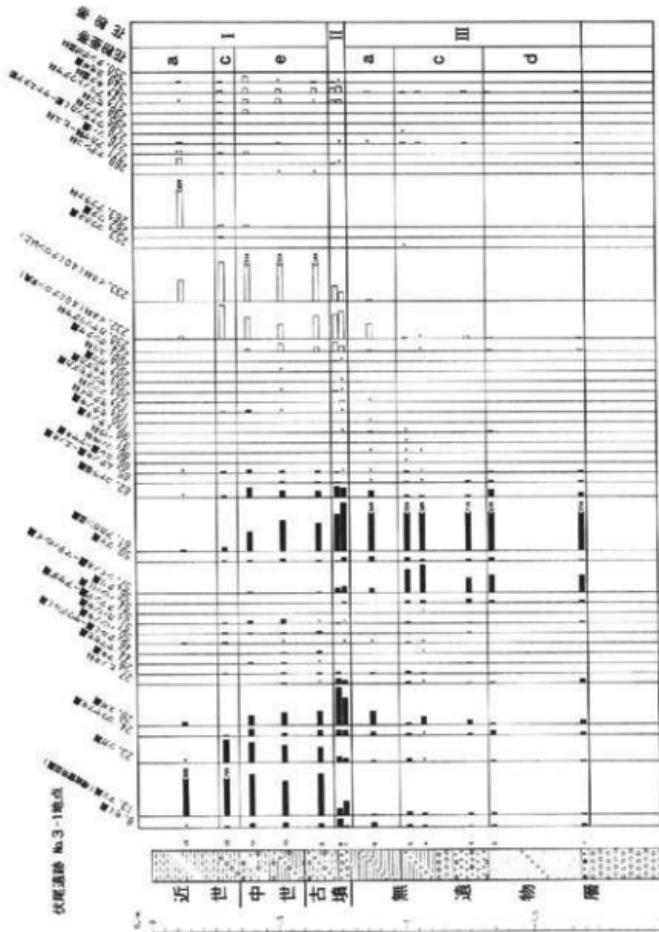
第93図 伏尾遺跡M.2-1地点の花粉ダイアグラム

× 100倍

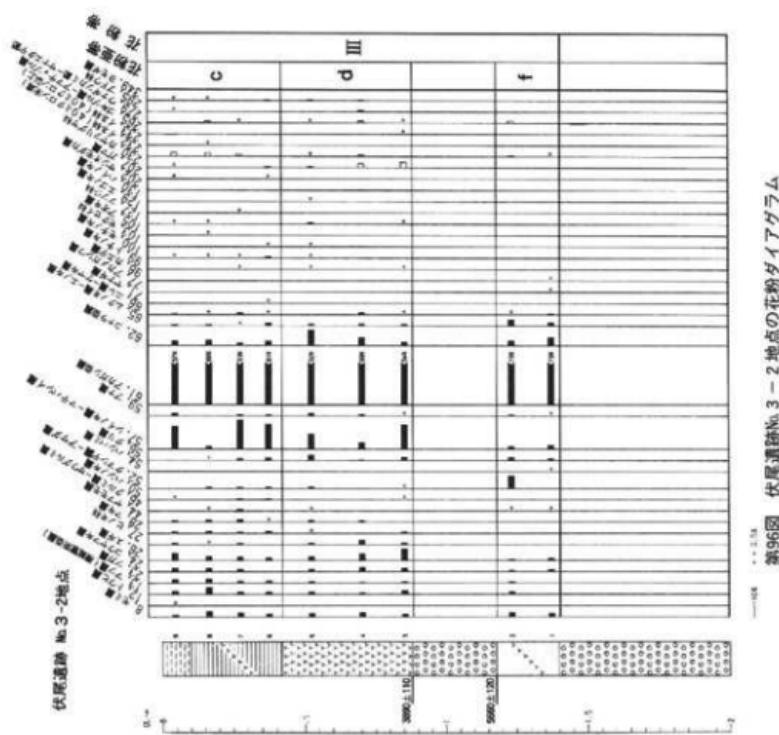




第94図 伏尾遺跡N<sub>2</sub>—2地点の花粉ダイアグラム



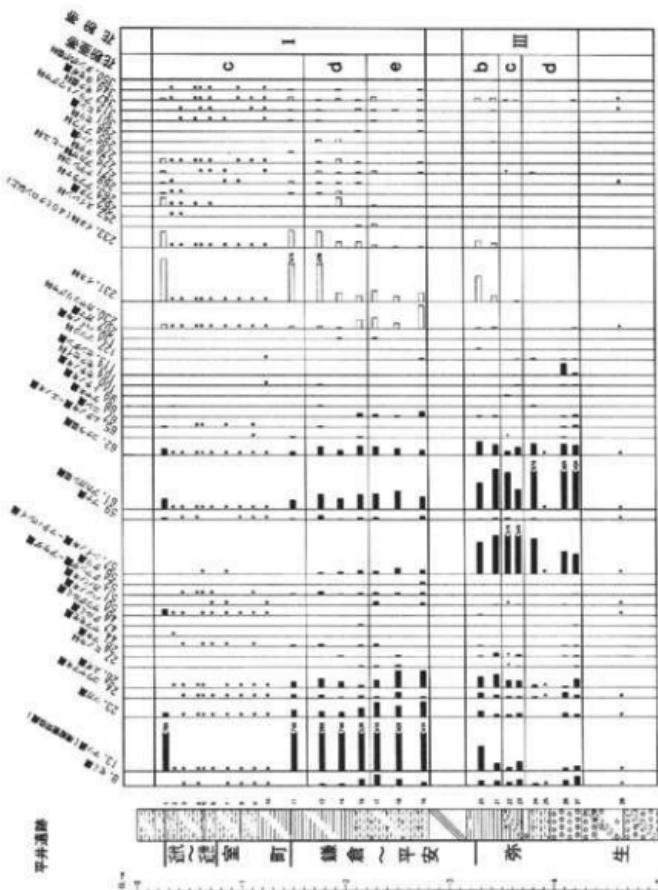
第95図 伏尾遺跡No.3-1 地点の花粉ダイアグラム



第96図 伏尾遺跡No.3-2地点の花粉ダイアグラム

第97図 平井道跡の花粉ダイアグラム

（参考文献）



第2表 陶邑北部の縄文時代以降の植生変遷

年 代	歴史 時代	平 井	伏 尾			大庭寺	野 キ 井			泉北丘陵	高城和泉山地
			3	1	2		3	2	1		
0	縄文 近世					スギ 原林	スギ 原 沼		スギ 原林 沼	スギ 原 沼	スギ 原林
100			アブ ラナ 栽培	二 次 急 荒 大		不 明	二 次 急 荒 大		二 次 急 荒 大	二 次 急 荒 大	二 次 急 荒 大
200	近世										
300			次 林				二 次 急 荒 大				
400											
500	室町		やや 荒 小?								
600											
700	鎌倉		耕 作 開始								
800											
900											
1000	平安										
1100											
1200	鎌倉		二 次 急 荒 大								
1300	飛鳥										
1400											
1500	古墳										
1600			耕 作 開始								
1700	後										
1800											
1900	奈		シイノキ 灌 木								
2000	中										
2100	生										
2200	我										
2300	早										
3000											
4000	後 漢										
5000	中 國										
6000	前 文										
7000	早										

— 141 —



# 図 版



調査地全景（東から）



調査地全景（南から）



B地区全景（西から）



B地区全景（南から）



C地区全景（西から）



C地区全景（東から）



A地区全景（南から）



B地区全景（東から）



C地区全景（北西から）

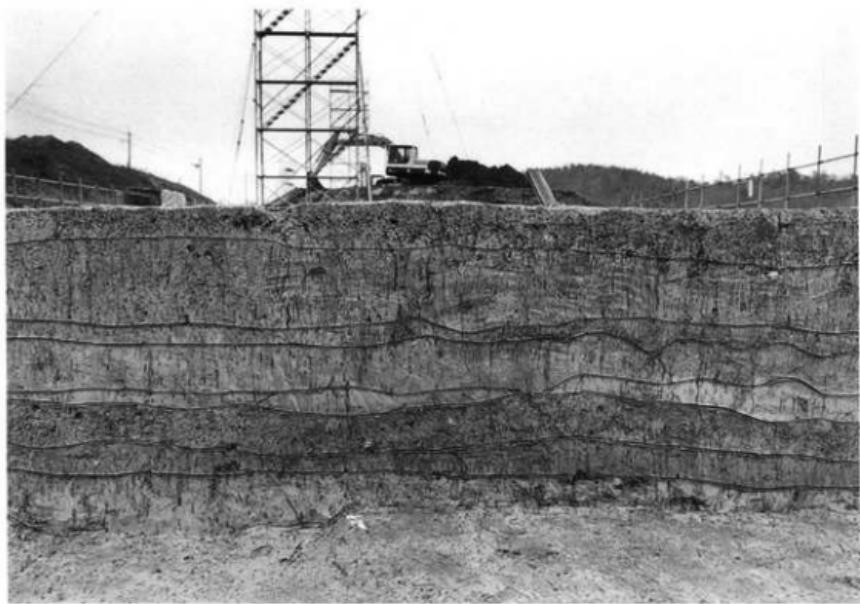


C地区全景（南東から）

図版六 その1AからC地区の遺構



1-A 南側断面



1-B・1-C間中央壁断面（東から）



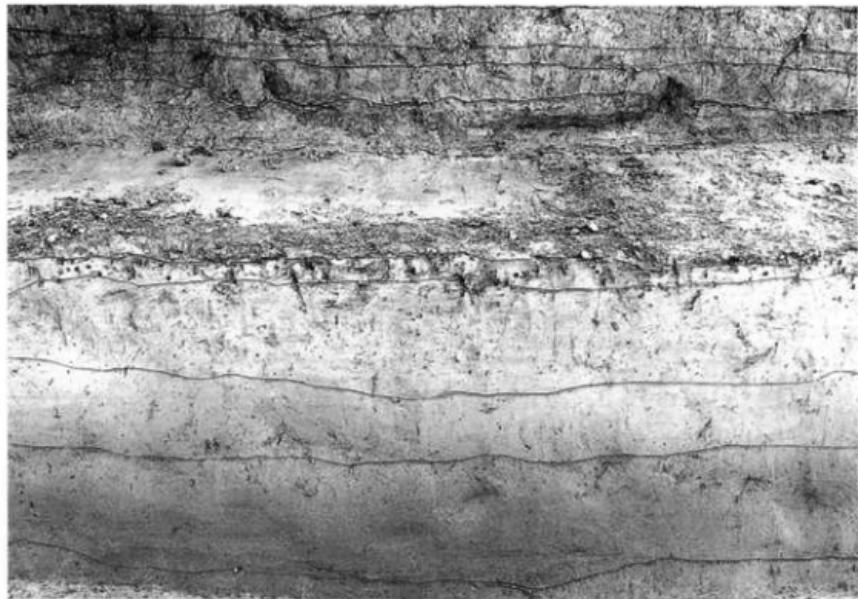
B地区南側断面



B地区西側断面



C地区北側断面



C地区南側断面



自然流路（A 2 流路）全景（西から）



自然流路（A 2 流路）全景（南から）



自然流路（A 3 流路）全景（北から）



自然流路（A 2 流路）断面（南から）



杭列（A～B断面）



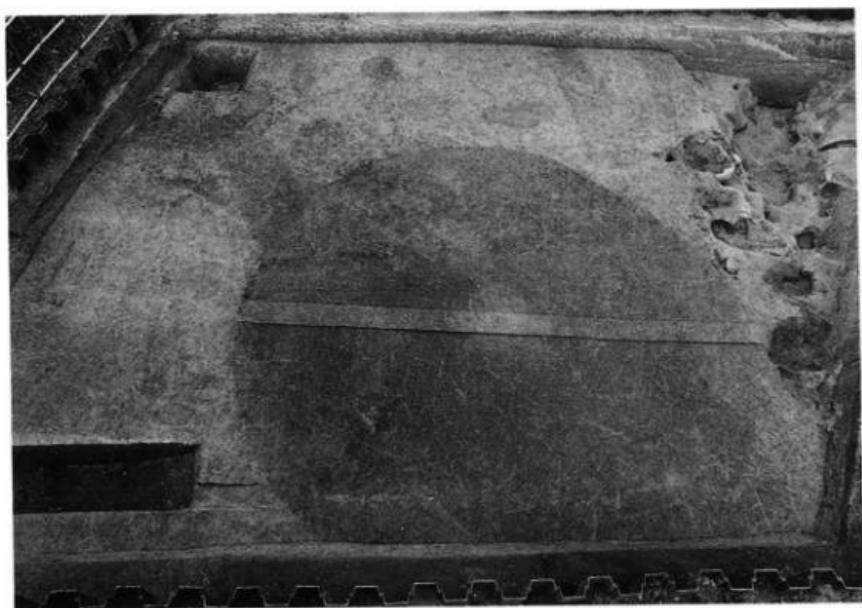
杭列（B～C断面）



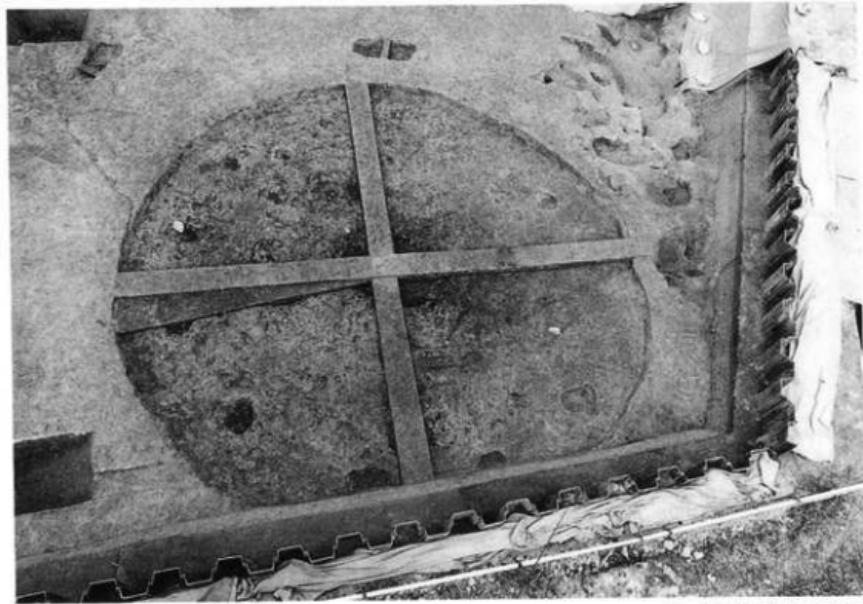
杭列 (D～E断面)



杭列 (E～F断面)

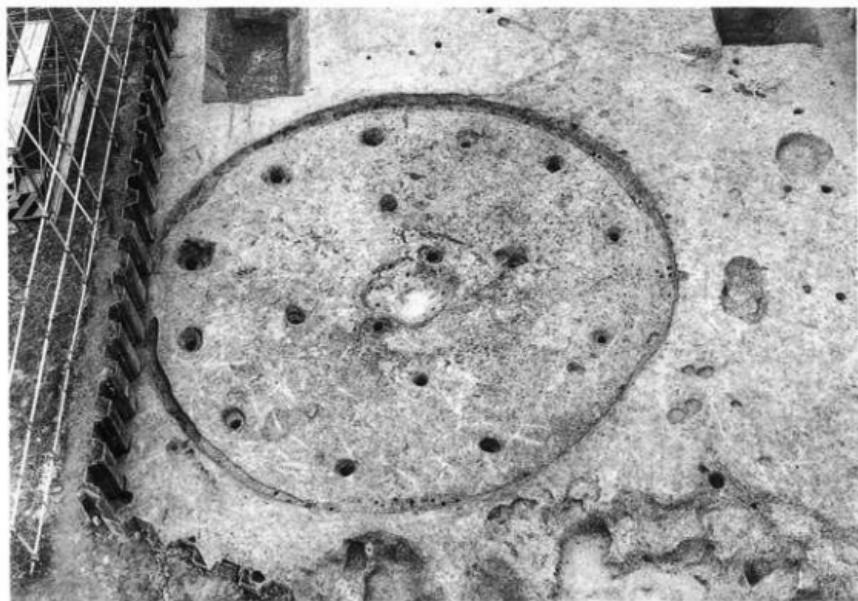


57-OD検出状況（南から）

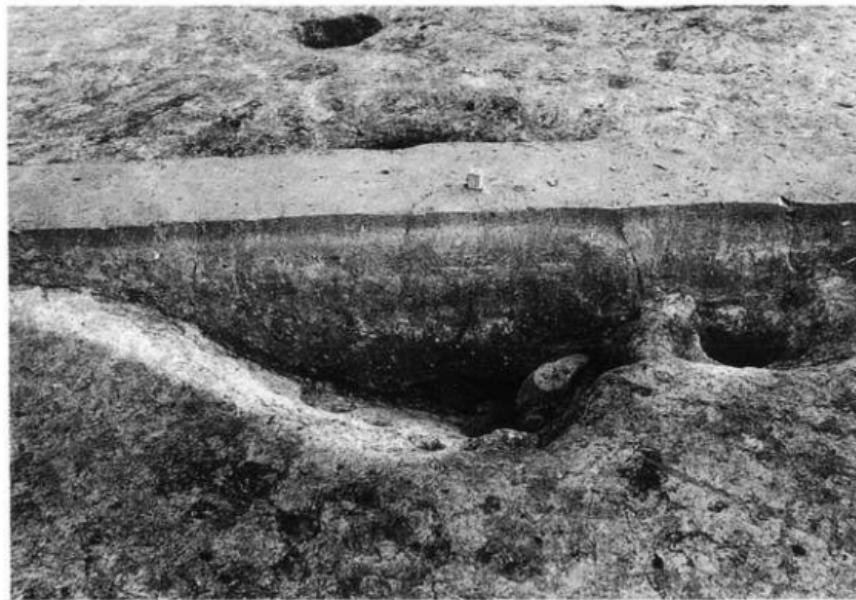


57-OD掘削状況（南から）

図版十四 その1A地区の遺構



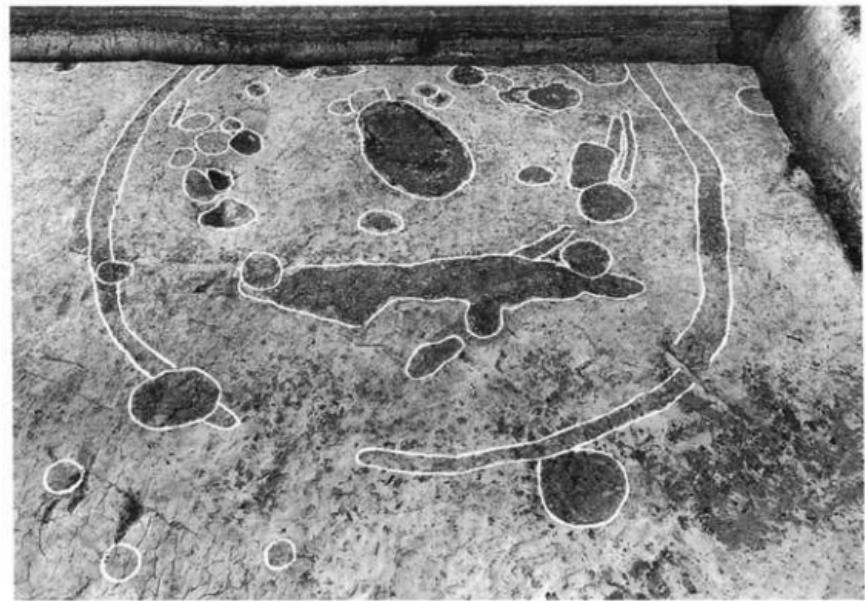
57-OD 全景（東から）



57-OD内 炉（855-OO）断面



1100-O D全景（南から）



1100-O D検出状況